

論文の内容の要旨

論文題目 広東語の文末助詞

氏名 飯田真紀

近年、中国語の文法研究においては、広東語を含む中国語諸方言についての研究がますます重視されるようになってきており、研究方法や研究対象も多様化している。しかしながら、中国語諸方言に広く共通して見られる文法カテゴリーである文末助詞については、最も研究レベルの高い標準語(普通話)においてすら、見るべき成果が少なく、活発な議論が行われていない。他方、広東語は文末助詞が特に豊富であり、非常に重要な文法カテゴリーとして位置づけられる。そこで本稿は広東語の文末助詞の意味機能の体系的分析並びに文法体系全体への位置付けを目指し、以下のような構成で議論を行った。

第 1 章では文末助詞の包括的分析を試みた先行研究の問題点の指摘を通じて、本稿での問題意識と目的を設定した。すなわち、一つ目の問題点として、文末助詞という文法カテゴリー固有の機能が何であるかが明らかになされていなかった。また、二つ目の問題点としてカテゴリーの体系性が十分に捉えられていなかった。すなわち、シンタグマティックな関係とパラディグマティックな関係によって構成される一つの体系をなしていることが十分に意識されていなかった。そこで本稿ではこれらの問題点を克服すべく、まず文末助詞というカテゴリー全体の固有の機能を明らかにし、そして文末助詞が体系を有するカテゴリーであるという認識のもと下位分類を行い各下位類を体系へ位置付けることを目標として設定した。

第 2 章ではまず文末助詞固有の機能を考察した。文末助詞の類全体を通じて見られる特徴は、それが日常会話に専ら出現するということである。このような振る舞いから、文末助詞はそれが付く文(発話)が、発話者たる「私」と発話現場である「今、ここ」を離れては存

在しない、非自律的なテキストであるという指標を付ける役割を第一義的に持つと考えた。次に数十個にも上ると言われる文末助詞の形式を、連用規則という統語的振る舞いを根拠に、同化や縮約といった音声的な現象に配慮しつつ、A類・B類・C類・D類の順で生起する4つの類に分類した。4つの下位類はそれぞれが違った意味機能を持っており、文末助詞が付く文(言表内容)の異なる側面に対する作用を司ることが予測される。そして実際に各類の意味機能は次の3章から6章までの各章において述べることになる。

第3章で論じたA類の文末助詞“住、嚟、先、添”はどれも動詞や形容詞など語彙的意味を持つ語から個別に機能拡張ないし文法化を起こしてきた形式で、文末助詞として専ら用いられるわけではなく、他のB・C・D類と比べると類としてのまとまりを欠く。A類にはまた文内部の節や句を構成する成分として生起する振る舞いを持つものがあり、必ずしも文全体と意味関係を持つわけではない。このように、A類は他の類の文末助詞とは振る舞いを異にし、文末助詞体系の中では周辺的な類である。

A類には類内部での連用の仕方からさらに2類が区別される。統語的に前に位置する“住、嚟”はいずれもコトの時間的あり方を示す点で共通する。前者は動詞としては「留まる、住む」という意味を持ち、アスペクト助詞として用いられる場合は「時間の推移とともに終結を迎えようとする動作を留めておく」という動作の形の表現(時間的あり方としては「持続」)を行う。したがって、これらの意味機能を引き継いだ文末助詞としての“住”は、コトを現在あるがままの姿で「留めておく」ように描くという、コトの非完結的な描き方を表す。“嚟”は動詞としては「来る」という意味を持つが、文末助詞としての働きには2種類の用法が区別され、コトの時間的あり方を表すのは動詞句の後に出現する“嚟”であり、これはコトを既然で完結的な姿で差し出す。統語的に“住”または“嚟”よりも後の位置に生起する“先、添”はコトの関係的あり方を示す。「追加する」という動詞に由来する“添”はコトの追加を表す。つまり、当該のコトを既存の別のコトの上に加算的に積み上げることで、背後にある何らかの尺度上で指す目盛りを進ませる意味を持つ。一方、「先の、先に」という意味の形容詞・副詞として使われることもある“先”は、文末助詞として当該のコトが他の何らかのコトよりも時間的に前に位置することを表す。

第4章ではB類の唯一の構成員であるg-を取り上げた。この形式はモノ化機能を持つ構造助詞“嘸”[ge3]が命題目当てに機能拡張したもので、命題をモノ化する働きを持つと考えられる。すなわち、命題の個別性を捨象することにより、命題を一般的で普遍的な性質のものとして提示する機能を持つ。

第5章ではC類の構成員である1-とj-を取り上げた。この2つの形式は事態に対する話し手の見立てを表す。文(言表内容)で描かれる事態に対して、1-はそれを「新しい状況」と見立て、j-はそれを「何らかの尺度において相対的に度合いが小さいもの」と見立てる。このような基本的用法の他に、1-には言表内容をめぐる主体(話し手)の認識状態が「新しい状況」であると見立てる認識変化表示の用法がある。また、j-にも相手の先行発話もしくは当該の自分の発話そのものが「相対的に価値の低いもの」とであると位置付ける拡張用法が

ある。このような 1-と j-の各用法を通じて見られるのはそれぞれ<変化>(1-)や<序列>(j-)の存在を捉えようとする話し手の見立てだと考えられる。

第 6 章では D 類に属す形式を取り上げた。D 類に属す形式は非常に多く本稿で全て議論することはできないが、文類型への生起状況と音声・音韻的特徴を手がかりにしてさらに下位分類される。まず、平叙文・疑問文・命令文の 3 種類の文類型の全てに生起するなど振る舞いの点で似た a3 と wo3 とを比較しながら取り上げた。この二つはいずれも発話を発信し伝達する段階での話し手による発信の仕方を表し分ける。a3 は聞き手に発話内容を聴取するよう要請し、wo3 は発話内容の伝達により聞き手に認識変化を促すというように、この両者は伝達プロセスにおいて機能分担をしている。a3 は発話を話し手の<声>という、情報の価値を持たない言語表現として聞き手に聞き取らせることだけを目指すのに対して、wo3 は発話を<情報>として伝達し、聞き手の情報更新を目指すのである。

次に a3 や wo3 とそれぞれ音韻的特徴を共有する a4 と wo5 を取り上げた。この 2 つは話し手が発話の発信伝達の営みに受け手の立場で関わることを表すもので、発話内容の受け取りプロセスの表し分けを行う。a4 は発信者の<声>として聴取される内容が何であることを示し、wo5 は発話伝達プロセスを通じてどのような<情報>を得たかを表すと考えられる。

次は発信者の立場から<情報>を聞き手に伝達する際に、聞き手の情報に依存するかのような述べ方を表す la1 と alma3 について考察した。la1 が聞き手情報へ依存した発話方法を無条件に表示するのと異なり、alma1 は当該情報の内容が自明なものであるという情報の性格への言及を含む。この類の形式は聞き手の情報保持状態に配慮しながら発話を行う点で前述の a3 や wo3 とは区別される。

以上で扱った形式は発話伝達プロセスへの話し手の関与の仕方を表示するものであったが、D 類の中のもう一つの大きな下位類として、次に命題の成立をめぐる話し手の認識的態度を表す一群の形式を考察した。gwa3 は命題が一定の蓋然性を持って成立するものであるという推測的述べ方を表す。me1 は話し手自身の予測とは反する命題についてその成否判断を聞き手に委ねる。一方、ge2 は命題が話し手の予測と反して成立するものであることを述べ立てる。これらの形式は認識判断的ムードを表す。他方、命題を現実世界において実現させることをめぐる話し手の態度を表す行為実行的ムードの形式として le4 を位置づけた。

最後の第 7 章は本稿の結論に相当し、2 章から 6 章までで議論した A 類から D 類までを体系の中に位置付けることにより文末助詞という類全体の枠組みを提示した。A 類の形式はいずれも文で述べられる事柄的内容の一部をなす。すなわち、文や述語が描くコトのあり方を表し分ける機能を持つ「コト目当て」の形式であり、それ自身、コトとともに文で述べられる事柄的意味の形成に参画するものである。それに対して B 類から D 類までの各類は、文の事柄的意味を作り上げる成分ではなく、文で述べられる内容(言表内容)に対する発話時の話し手からした様々な主観的態度——<言表態度>——を表すものである。その中で B 類は文が表す命題を一般的性質のものに変える働きを持つ。一方、C 類は主に文が描く事態に対する話し手の見立てを表すのであった。B 類が命題の性質そのものを規定する点で客体

的・素材的であるのに対して、C類は話し手による見立てという、より主観的・主体的な作用を持つと言えよう。そして、最後尾に位置するD類は話し手が言表内容をどのようなものとして発話の場に差し出そうとしているのか、実際に発話を行う段階における言表内容の表出方法を表し分ける機能を持つ。これと比べるとB類C類はいわば内容的側面に関与するものだと言えよう。したがって、本稿ではB類C類といった表出以前の内容目当ての作用を持つ文末助詞はそれだけで自足的に生起することはなく、何らかの有形(D類)・無形の表出方法を必ず伴うと考える。

最後に文末助詞と副詞や応答詞・感動詞といったその他の文法的カテゴリーとの接点を模索し、また文末助詞とイントネーションなどの音声・音韻的手段との関わりについて今後の展望を交えながら議論した。